吉野町内の南朝ゆかりの場所

■南北朝時代、そのとき何があった？　吉野では？

鎌倉幕府をたおし、天皇による政治をはじめた後醍醐天皇。しかし、その体制下で、次第に様々な不和がでてきました。そんな中、鎌倉幕府の討幕を達成。京都に戻り、政治をはじめる。討幕に伐に足利尊氏が向かった時、事件がおこります。反乱鎮圧後、足利尊氏が弟・直義の反対をうけ、後醍醐天皇の帰京命令を無視したのです。このことがきっかけで、後醍醐天皇と足利尊氏の対立が決定的となり、戦いになってしまいます。数度の戦いの後、後醍醐方は尊氏軍に敗北。三種の神器をとりあげられ、京都にとじ込められたのでした。

すきをみて京都をのがれた後醍醐天皇は、一路、吉野をめざします。吉野についた後醍醐天皇は、尊氏の三種の神器はニセモノだと宣言。自分のもつ三種の神器こそ本物だと主張して、吉野に南朝をひらきました。京都へ帰りたいと願い、尊氏ら北朝と戦いつづけた後醍醐天皇でしたが、その願いもむなしく、吉野で亡くなったのでした。

後醍醐天皇の思いをついで、後村上天皇が即位。楠木正行らが中心となって、北朝と戦いをつづけました。しかし、四條畷の戦いで楠木正行が負けると、敵方の武将・高師直は吉野山まで兵をすすめ、吉野山に火をはなちます。すんでのところで吉野山から逃れた後村上天皇たちは賀名生で体制をととのえ、戦いを続けるのでした。

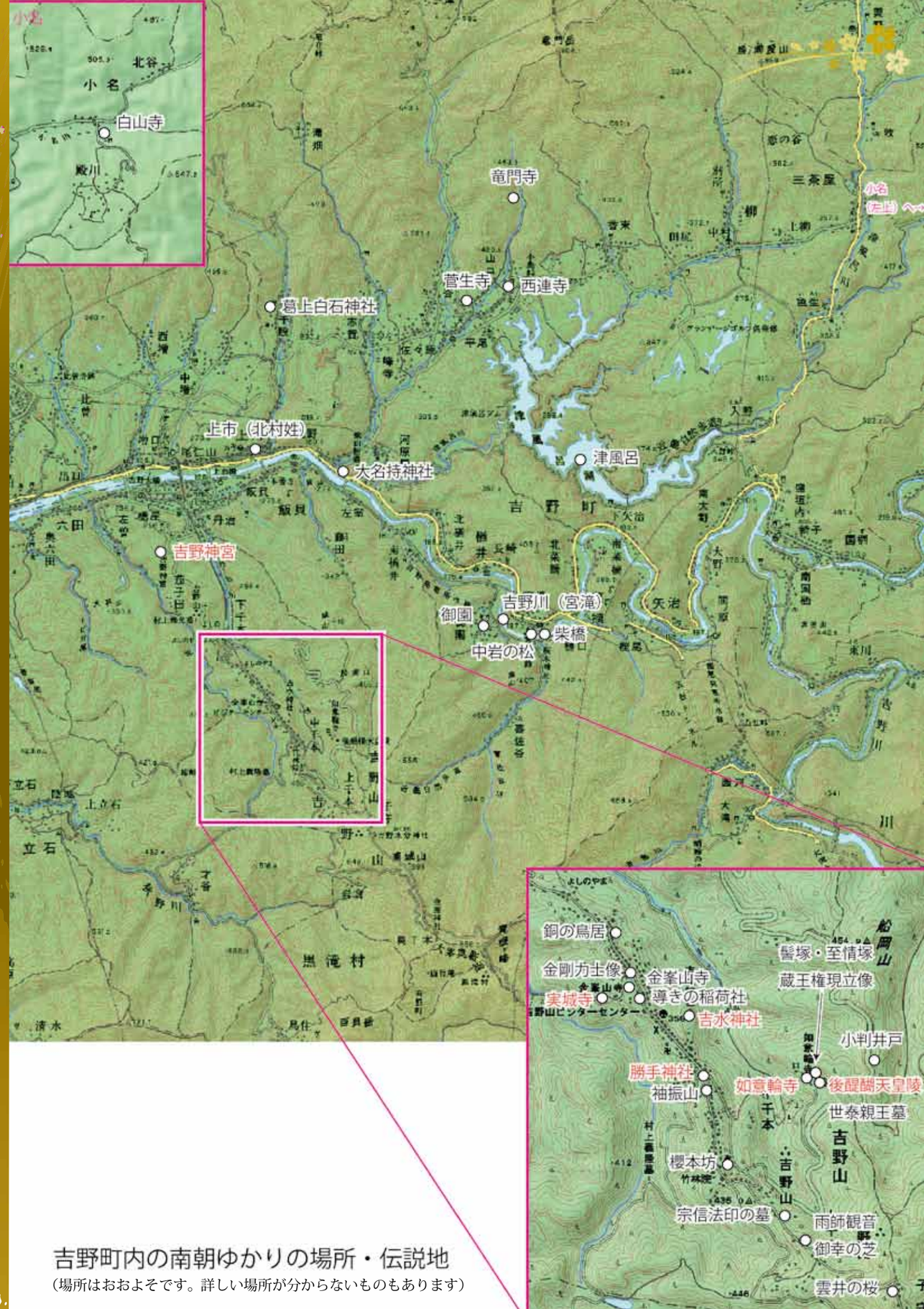
同じ頃、南朝より優位にたった北朝では仲間割れがおこります。結果的に南朝と北朝の均衡がたもたれ、天皇が二人いるという時代がもう少し続くことになるのです。

■南北朝時代の主な人物

後醍醐天皇：吉野に入り、南朝をひらいた天皇。
後村上天皇：後醍醐天皇の後を継いだ南朝の天皇。
長慶天皇：後村上天皇の後を継いだ南朝の第三代天皇。
楠木正行：楠木正成の息子。小楠公とも。南朝の武士。
新田義貞：鎌倉幕府討幕で活躍した武士の一人。
足利尊氏：後醍醐天皇に敵対し、北朝をおこした武士。
高　師直：北朝の有力な武士。吉野山を焼き討ちした。

■南朝の起こりとその前後のできごと（年表）

年	月	内容
1333	6	後醍醐天皇、鎌倉幕府の討幕を達成。京都に戻り、政治をはじめる。討幕に貢献した護良親王、足利高氏への不信から帰京を拒否する。
		足利高氏、後醍醐天皇の諱の一文字をもらい、名を尊氏に改める。
		護良親王、後醍醐天皇の説得に応じ、京都に入る。
	10	護良親王、尊氏暗殺の疑いで逮捕され、鎌倉に幽閉される。
	7	鎌倉幕府の残党（北条氏）が、後醍醐天皇に対し挙兵する。
1335	8	足利尊氏、北条氏討伐のため鎌倉に向け出陣し、北条氏を敗走させる。
	11	足利尊氏、鎌倉に居すわる。後醍醐天皇、新田義貞に尊氏の討伐を命じる。
1336	1	足利尊氏、新田義貞の軍をしりぞけ、京都に進軍。後醍醐天皇、足利尊氏に一時京都を占拠されるが、その後挽回。足利尊氏を九州に追いやる。
	5	足利尊氏、体制を立て直し、光厳上皇から院宣を得て、九州から京都に進軍。楠木正成らを湊川で打ち破り、京都に攻め込む。
	12	後醍醐天皇、京都を脱出。吉野で南朝をひらく。
	8	北朝で光明天皇即位。足利尊氏、征夷大将軍に任命される。
1338	9	後醍醐天皇、勢力を挽回するため、各地に皇子を派遣する。（義良親王：奥州、宗良親王：常陸、懐良親王：九州）
1339	9	後醍醐天皇、薨去。後村上天皇が即位する。尊氏、後醍醐天皇の菩提を弔い、天龍寺を建立する。
1347	9	楠木正行、摂津で挙兵。藤井寺の戦いで北朝軍に勝利する。
1348	1	高師直（北朝）、正行討伐のため出陣。四條畷で戦い、正行軍を破る。師直は吉野山に向け進軍。後村上天皇ら脱出後の吉野山に火を放つ。
1349	6	高師直、不法行為が目立ったため、免職処分を受ける。
	8	高師直、軍事力で足利尊氏らを威圧。免職処分を解かせる。
1350	10	足利尊氏の異母弟 足利直義、京都を脱出し、南朝に合流する。（観応の擾乱）



吉野町内の南朝ゆかりの場所・伝説地
（場所はおおよそです。詳しい場所が分からないものもあります）

吉野町内にのこる

南朝ゆかりの場所

伝説がのこる場所

【吉野山地区】

雨師観音　南北朝時代の梅雨のある日、後醍醐天皇が吉野山を散策されていると、雨が降ってきました。近くの観音堂（雨師観音、夢違い観音とも）で雨宿りをし、天皇が次の歌をお詠みになると、突然空が晴れ渡り、人々は皆、天皇の徳の高さのおかげと喜んだといいます。**「ここは猶丹生の社に程近し　祈らば晴よ五月雨の空」**今、お堂は廃絶し、小さな祠が建っています。

勝手神社　一三四八年、高師直が吉野山に攻めてきた時のこと。時の天皇、後村上天皇は、高師直が吉野山に着くより前に、賀名生へと向かわれます。その途中、勝手神社の前を通りすぎる時に、後村上天皇は馬から降りて、涙ながらにこう詠まれたといいます。**「頼むかひ無きにつけても誓ひてし　勝手の神の名こそ惜しけれ」**

銅鳥居の額　銅の鳥居の額「発心門」を書いたのが、一説に後醍醐天皇だといいます。

金峯山寺　南北朝時代の頃、金峯山寺には、建物のまわりをかこむ回廊や、大塔などの建物が建っていました。しかし、一三四八年、高師直によって燃やされてしまいました。

雲井の桜　佐藤忠信花櫓の上にあった、古い茶亭の庭に、雲井の桜とよばれる桜が植わっていました。ここでは、後醍醐天皇が次の歌を詠んだと伝わります。**「ここにても雲井の桜咲きにけり　ただかりそめの宿と思へど」**ただ、この桜は明治三〇年に台風で倒れてしまいました。

後醍醐天皇陵　後醍醐天皇がお亡くなりになった後、如意輪寺の傍らの塔尾につくられた陵墓です。後醍醐天皇の遺言にしたがい、北向きにつくられました。『太平記』には、楠木正行が四條畷の戦いに向かう前にお参りしたことなどが書かれています。

小判井戸　如意輪寺の東にある、小さな井戸です。後醍醐天皇が吉野の行宮で歌を詠まれたとき、この井戸から御料水（天皇がお使いになる水）をとったと伝わります。

金剛力士像（金峯山寺）　お像の中にかかれていた墨書で、南北朝時代につくられたことが分かっています。南朝との関係は定かでありませんが、当時の仏像として貴重なものです。

蔵王権現立像（如意輪寺）　後醍醐天皇の念持仏（個人的にお祀りした仏）とも、後醍醐天皇が自らおつくりになったとも伝わっています。この蔵王権現像が入るお厨子には、延元元（一三三六）年一月十六日の年号や、後醍醐天皇直筆と伝わる詩などが書かれています。

至情塚　南朝に仕えた女官・弁内侍が、武将・楠木正行の死を悲しみ、自らの髪を切って埋めた場所だといわれています。

実城寺（金輪寺などとも）　延元二（一三三七）年、後醍醐天皇が吉水院からうつられ、南朝の皇居としたお寺だと伝わります。明治八年に廃寺となり、今、同地には南朝妙法殿が建っています。

この場所で後醍醐天皇は『新葉和歌集』に載せる和歌を選んだとされます。また、天皇みずから茶入れ十二（二十一とも）をおつくりになったといい、その形は薬器に似ていたそうです。今、お茶の世界で薄茶器を金輪寺といいますが、その名の由来は、このことだと伝わります。また、瀬戸内海の忽那島にいた五條頼元に送った綸旨（もとどりの綸旨）もこの場所で書かれたといいます。後醍醐天皇が愛した横笛一管、瓠笙二管、羊皮鼓一面が保管されていました。

袖振山　後醍醐天皇が吉野山でおられるとき、豊明節会という宴会を開かれました。同じ宴会は京都の宮中でも行っていたのですが、ありし日の宴会とあまりにギャップがあることを嘆かれたそうです。その時、かつて天武天皇が天女が舞うのを見た、という袖振山が目にはいり、一首歌を詠まれました。**「袖返す天つ乙女も思い出よ　吉野の宮の昔語りを」**

その後、後醍醐天皇が自分の境遇を嘆いてぼーっとしていると、袖振山から雲がたち込め、突如現れた不思議な少女が、天皇に歌を返したといいます。**「返しなば雨とやふらむ哀れしれ　天つ乙女の袖のけしきを」**

宗信法印の墓　宗信法印とは、吉水法印とも呼ばれた金峯山寺の有力者です。護良親王ともかかわりがありましたし、後醍醐天皇を吉野山にお招きした人物でもありました。後醍醐天皇がお亡くなりにあった後は、うろたえる吉野山の人々に後醍醐天皇の遺志を実現すべきだと訴え、騒動を収めるなどしています。今、宗信は吉野山の火の見櫓と呼ばれる場所から少し上った場所で、静かに眠られています。

如意輪寺　後醍醐天皇の勅願寺と伝わります。また、後村上天皇の九回忌が行われたお寺でもあったようです。

『太平記』によれば、楠木正行が四條畷の戦いに向かうとき、後村上天皇に面会した後、後醍醐天皇陵にお参りをされたようです。その後、如意輪堂の板壁に一族の名前を書き連ねたといいます。正行は、その奥に次の歌を書き記しました。**「返らじとかねて思へば梓弓　なき数にいる名をぞとどむる」**そして、各人が自分のもとどり（髪の毛を頭の上で集めて束ねた部分）を切って仏堂に投げ入れ、四條畷へと向かったのです。（一族の名前を書きつらねたのは如意輪寺の過去帳で、次のような歌も書き記したとの異説もあります。**「さきだたば　おくるる人を待つやせん　ひとつはちずのうちを残して」**）

今、如意輪寺の宝物殿には、「かえらじと～」の歌が書かれた扉がのこされており、その境内には、もとどりを埋めたもとどり塚が移築されて残っています。

導きの稲荷　後醍醐天皇が京都をのがれて奈良方面に向かっていた途中、ふと休んだ場所が伏見稲荷社の前でした。暗い夜で、道行きに苦労していたところだったので、後醍醐天皇は歌を詠み、お稲荷様にお祈りをささげることにしました。**「むば玉のくらき闇路に迷ふ也　我にかさなんみつの燈火」**。すると、赤い雲が立ち込め、吉野への道を示したといいます。この後醍醐天皇を導いたお稲荷様をお祀りしたのが、今、蔵王堂の南側にある導きの稲荷社です。

御幸の芝　後醍醐天皇の御幸があった場所です。雨師観音のあたりを、今もこのように呼びます。この場所からの景色は、かつて吉野八景の一つにも数えられていました。

吉野神宮　明治天皇発願の神社で、後醍醐天皇などをお祀りしています。その御神体は、吉水神社で祀られていた、後村上天皇お手製とされる後醍醐天皇の尊像です。

宝物には、後醍醐天皇の色紙と楠木正行の甲冑が伝わります。色紙の内容は次の通りです。**「ながらふる　かひこそなけれ　あふことの　かへぬ命の　のこるつらさは」**。また、高師直が吉野山を攻めた際、この場所に陣をしいたともいわれています。

吉水神社　後醍醐天皇が吉野山で最初にお過ごしになったのが、吉水院（今の吉水神社）でした。吉水神社には、今も後醍醐天皇玉座の間が残っています。

その時のエピソードとして、このような話が残ります。後醍醐天皇が座敷の床を枕として、微睡んでおられたとき、遠くから谷川の音が聞こえ、次の歌を詠まれました。**「花にねて　よしや吉野の吉水の枕の下に石はしるをと」**

こんな話も残ります。後醍醐天皇が吉野にお越しになった翌年の1月末、後醍醐天皇が次の歌をお詠みになりました。**「み吉野の山の山守こと問わむ　今いくかありて花は咲きなむ」**。宗信は、こう返されたといいます。**「花咲かむ頃はいつともしら雲の入るをしるべにみ吉野の山」**。

また、後村上天皇が後醍醐天皇のお像をつくらせて（お手製とも）、吉水神社でお祀りをさせたといわれており、そのお像は今、吉野神宮にうつされています。ほかにも後醍醐天皇ゆかりの宝物として、金輪寺茶入れ・硯・横笛、後村上天皇ゆかりの宝物として『新葉集』などが保管されています。

世泰親王墓　後醍醐天皇のすぐ下にある陵墓で、長慶天皇の皇子・世泰親王の墓とされます。ただ、江戸時代にはこの場所が髪塚と考えられていたようで、世泰親王墓は児童松という場所と考えられていたようです。

【中荘地区】

柴橋　一三四八年、高師直が吉野山に攻め込んできました。事前に高師直の襲撃を察知した南朝の方々は、吉野山を脱出します。

その脱出のおり、女性ばかりの一行が吉野川を渡ろうとすると、橋が途中で壊れてしまっているではありません

か。途方に暮れていると、伊賀局という人が、近くの松やサクラの大木を引き折って、渡れるようにしてしまったそうです。これが、柴橋の前身ともいわれています。

中岩の松　吉野山に南朝があった時、幼かった寛成皇子（後の長慶天皇）が菜摘へ鷹狩りに出かけたそうです。皇子は、その道中でみた松の生えた岩をとても気に入り、「この松を天皇（後村上天皇）にもお見せしたい。岩ごと皇居へ持ち帰れ」と命じたといいます。

御園　南朝のお花畑の跡と伝わります。また、御園出身の御園兵衛という人が、中荘地域の旗頭として南朝につくしたといわれています。

吉野川（宮滝）　左衛門尉康方という人物が、魚とりで鵜に負けまいと潜水し、スズキと鯉をつかみ取りにした場所だとされています。

【龍門地区】

大名持神社　南朝の支持者であった僧・運祥によって書き写された大般若経が保管されていました。この写経には、南朝を支えたと見られる津風呂氏の名前も記されていました。

葛上白石神社　後醍醐天皇が、病気がなおるよう祈願した神社だといわれています。

西蓮寺　楠木正行が四條畷で亡くなった後、弁内侍（至情塚の欄を参照）は髪を下ろして龍門の西蓮華臺院で過ごしたと伝わります。この西蓮華臺院は、一説に西蓮寺のことと言われ、今も鐘楼南側に「しょうじあんあと」と呼ばれる場所があります。

菅生寺　弁内侍（至情塚の欄を参照）が住んだ西蓮華臺院は、一説に菅生寺だともいいます。

津風呂　現在、津風呂湖に沈んだ津風呂村には、津風呂氏という人物が住んでいました。この方は、宇陀の牧氏とともに南朝を支えた武将の一人でした。津風呂氏は写経をしており、経典に名前が残っています。この経典はかつては大名持神社に置かれていましたが、現在は川上村の運川寺に置かれています。

龍門寺　南朝に仕えた弁内侍が出家後、楠木正行の菩提を弔った場所といわれています。また、後醍醐天皇の勅願寺だったともいいます。

【中龍門】

白山寺　後醍醐天皇の勅願所に定められたと伝わります。

【上市・水分】

北村姓が多いワケ　後村上天皇が吉野山におられる時、上市の人が身の周りのお世話をした。後村上天皇がその者に、どこから来たのか尋ねたところ、その者が「ここからみて北の村に住んでいる」と返事をされたため、北村の姓を賜ったのだといわれています。